
けいおん！ Memorial Reverie

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！Memorial Reverie

【Nコード】

N5104V

【作者名】

鮮血の刻印

【あらすじ】

鮮血の刻印が今まで手掛けていたけいおん！の二次創作、【けいおん！Fragment】【けいおん！Remembrance】【けいおん！Sincerely】【けいおん！Eternal Night】を全て同じ世界観で描いた、新たなけいおん！の恋愛小説です。

舞台となる桜高は、共学となります。この手の物がお嫌いな方は、戻る事を推奨します。

F、R、S、ENの主人公達と、この作品で新たに加えられたキャラを織り交ぜていきます。

ヒロインは、中野梓、秋山澪、平沢憂、瀧エリ、斎藤堇の5名です。

更新は不定期となります。 悪しからず。

—PROLOGUE—

けいおん！Memorial Reverie
PROLOGUE

寒さが身に凍みる2月の某日。

どこまでも蒼く澄んだ蒼天に見守られながら、何人もの人が地を歩いて行く。

「うう……………」。

「どうしたの？」

眼鏡をかけた少女が、自分の隣で震えている少女の様子に首を傾げる。

2人共、中学生か高校生ぐらいの見かけをしていた。

「これから見に行く高校の合格発表、緊張しちゃうよー。」

ガチガチに震えた友人に、眼鏡をかけた少女は笑う。

「今更どうにもできないし、行きましょう。」

「うう……………」

お兄ちゃんも一緒に来て欲しかったなあ……………」

「後で合流するって言っていたじゃない。
ちゃんと来てくれるわよ。」

そして、2人はまた歩きだした。

所変わって、都内某所。

ブンと、拳が空を裂く音が走り、続いて鉄に体を打ち付ける音が響いた。

「この！」

「……。」

何故か、2人の男性がエレベーター内で取っ組み合いをしていた。

片や焦りの表情を浮かべた男性。

片や平然と黙っている少年。

「おらあっ！」

繰り出された拳を自分の腕で逸らし、その腕を掴んだまま懷に踏み込む少年。

男は、ただその速さに瞠目するしか無かった。

「ハア！」

男性の顎目掛けて、肘を思い切りぶつける。

意識を揺らがせ、そこから更に男の頭を鷲掴みにし、エレベーターの壁に叩きつける。

「ガ……………」

短い声をあげ、男はズルズルと倒れた。

「任務、完了……………」

ポツリと呟いた少年の背にあるエレベーターの扉が開いた。

「こんな狭い中でよくやったなあ、お前……………」

「リーダー……………お疲れ様です。」

暗灰色の髪を短髪で綺麗に纏めた少年は、抑揚の無い声でそう言った。

「お兄ちゃん、そろそろ合否発表、見に行かないと。」

藍色のリボンでポニーテールに結ばれた髪を揺らし、女の子が兄に話しかける。

「ん、ああ。」

短く淡白に返し、兄は立ち上がる。

その時、携帯電話が着信を知らせるべく震えた。

「もしもし？」

「こんな時間にごめん。」

「大丈夫だ。」

「で、用件は？」

「昨日の事の確認。」

「忘れてねえよ。」

「ちゃんとお前の代わりに見てくるよ。」

「助かるよ。」

電話を切り、彼は妹がいつの間にか用意してくれた防寒着に袖を通した。

「行くの、メンドイなあ……………」

気だるそうに言われた言葉に、妹は苦笑いした。

（来年は高校受験か……………。）

純粋な茶髪の髪を掻き、少年は冬の空を窓から見上げた。

「せつかくだし、彼女達の所に戻るのも悪くないかも。」

引き出しから一枚の手紙を取り出し、その内容に目を通す。

「今日、合否の発表か……………」

まあ、やる時はやる人だから大丈夫か。」

手紙をしまい、鉛筆を手取る。

（問題は、もう1人の僕が出るかどうかだけど……。
さすがにこればかりはわからないよね。）

息をつき、離れた幼馴染の顔を思い浮かべた。

「ふわぁ……………」

まだ覚醒しきっていないのか、少年は欠伸をしながら階下へと下りる。

「そろそろ、高校を決めた方がいいかな……………」

カレンダーを見詰め、自分が高校生になる時期を見出す。

「そういえば……………」

ふと、カレンダーの下にある写真を見て、彼は微笑した。

「アイツ、どうしてんのかな……………」

「ハア、寒い……………」

呟き、身を縮こませる少年。

宵闇を表すような黒髪は、男にしては長く、肩の位置よりも少し伸びていた。

彼は今、知り合いの付き添いで高校の合否発表に付き合っていた。

しかし、彼女が通うのは女子校。

そのため、彼は入り口で待つ事にした。

「義姉さんが行けないからって、男の俺に付き添いを頼むものかなあ？」

嘆息し、しばらく空を見上げる。

すると、携帯電話が振動した。

「もしもし？」

「あ、お兄ちゃん！」

私、桜高に合格したよう！」

電話口から聞こえてくるけたたましい声に、彼は少し離れた。

「おめでとう。」

「えへへ、ありがとう。」

「夜には合流するから、その時にまた。」

「うん、じゃあね。」

「ああ。」

通話を終わると、丁度付き添った相手が戻ってきた。

「合格していました。」

「それは良かった。」

ちゃんと義姉さんに知らせておきなよ。」

「はい。」

「それじゃあ、帰ろうか。寒くてしょうがないし。」

「そうですね。」

少年は蒼天を見上げ、歩き出した。

—PROLOGUE—（後書き）

鮮血

「と言いついで、【けいおん！Memorial Reverie】の解禁です！」

英樹

「プロローグ、誰一人として名前が出て無いし……………」

霧明

「こんなんで大丈夫なのか？」

皐

「どうなのでしょう？」

龍夜

「それに、今も精神状態はよろしくないのでしょうか？」

紫苑

「更新は不定期だし、大丈夫なんじゃないでしょうか？」

鮮血

「今月中には、1話目を挙げたいなあ……………」
「そして、ちゃんと完結させたいよ……………」

英樹

「それすら不安か……………」

第1話 「START ―それぞれの始まり―」（前書き）

鮮血

「なんとか1話目を書けた……………」

英樹

「お疲れさん。」

鷹斗

「けど、これからは無理しちゃダメですよ？
大学の事で、かなり忙しくなるんですし。」

鮮血

「分かってるよ……………」

くそう……………ただでさえやる気が出にくいのに、なんだって大学の事をしなきゃならないんだ！」

霧明

「まあ、のんびり夏休みを過ごせる時なんて無いだろ。」

英樹

「だな。」

鮮血

「まあ、ね……………」

第1話 「START——それぞれの始まり」

暖かな陽気が降り注ぐ道を、1人の少年が歩いていた。

「ふわぁ……………」

寝不足なのか、欠伸をする。

「学校ぐらい1人で行けるだろうに……………」

呆れ気味の彼は、学校では無く妹分の家に向かっていた。

理由は、昨日の夜にかかってきた電話にある。

「ねえお兄ちゃん、明日は一緒に学校に行こうよ！」

「は？」

いきなりの事に、彼は間の抜けた声を出した。

「だからね、一緒に学校に行こうって事。」

「いや、まあそれは分かるけど……。
どうして一緒なんだ？」

「それじゃあ、家で待っているからね。」

そう言って、電話は一方的に切られた。

「ハア……………」

その事を思い出し、彼は溜息をついた。

ようやく目的地である妹の家に到着した。

呼び鈴を鳴らし、誰かが出てくるのを待つ。

「はい？」

やがて扉が開いた。

「よう、憂。」

「お兄ちゃん。」

妹分の憂に簡単な挨拶をする。

しかし、電話で話したのは彼女の方では無い。

「唯は？」

憂の姉で、少年のもう1人の妹分、唯の様子を聞く。

（どうせぐっすりと寝ているんだろうけど。）

なんとなくそんな予想をたてた彼だったが、憂の口から出た言葉に耳を疑った。

「お姉ちゃんなら、30分ぐらいに家を出たよ?」

「は?」

「そういえば、お姉ちゃんの時計、少し進めてあったよ。」

「ハア……………」

本日2度目の溜息をつく。

「大方、遅刻しないように進めたんだろうな。」

けど、進めた事を忘れて、それが正規の時間と勘違いしたって所か……………」

「お姉ちゃんらしいね。」

「やれやれ……………」

「じゃあ、俺も行くよ。」

「行つてらっしゃい、お兄ちゃん。」

先に学校に向かった唯が、向こうで何をしているか心配になり、少年も学校へと歩きだした。

一方、話題になっていた当人、平沢唯はというと――

「私、平沢唯 あなたは？」

――1人の少年と話していた。

「……風星霧明。」

淡泊にそう返した少年は、右目が普通の人と違っていた。

幼少期の頃、事故に遭い失明したのだ。

「名前、無いの？」

霧明と聞き、無名と勘違いした唯は、寂しそうに訊ねる。

「無名じゃなくて霧明だ。」

頭を掻き、携帯電話に文字を打ち込む。

それを見た唯は、簡単に納得した。

「じゃあな。」

これ以上は話す事が無いと、霧明は踵を返す。

「待ってよ、なつつん。」

しかし、唯に奇抜なあだ名で呼ばれ、彼は唯の方を向いた。

「何で俺がなつつんなんだよ？」

「いいあだ名でしょ？」

笑う唯に、霧明はただ溜息をついただけだった。

「どこがだよ。」

今度こそ踵を返し、霧明はどこかに行った。

「それにしても鷹斗の奴、何やってんだ？
珍しく約束時間に来ないし……………」

携帯電話にも連絡が無い為、恐らくこちらからかけても出る確率は低いだろう。

「気長に待つとするか。」

呟き、蒼天を見上げた。

けいおん！Memorial Reverie

第1話 「START ―それぞれの始まり―」

「多分、ここら辺のはずなんだけどなあ……………」。

霧明の口から出た友人、神貫鷹斗は道端に膝を付き、目を皿にして何かを探していた。

「何をやっているんだ？」

すると、誰かに声をかけられた。

面を上げると、自分と同じ制服に袖を通した少年がいた。

しかし、ネクタイの色が違った。

「いえ、大切な物を落としちゃったみたいで……………」

苦笑いする鷹斗に、少年は訊ねる。

「何を探している？」

「三日月型のペンダントです。」

「ペンダントなら、そう簡単には落とさないと思うが？」

「実は、家を出る時にはまだ首にしてなくて。」

「出そうとして落とした訳か。」

「ええ。」

「俺も探すよ。」

時間にはまだ余裕があるし、妹には遅れる主旨を伝えたからな。」

「助かります。」

少年も加わった為、ペンダントは程無くして見つかった。

「助かりました。えっと……………」

そういえば、まだ名前を伺っていませんでしたね。」

ペンダントを首から下げ、背筋を正し、鷹斗は名乗る。

「神貫鷹斗です。」

今年度より、桜高に入学した1年です。」

「礼儀正しいな。」

灘宮英樹だ。神貫より1つ上の2年生だな。」

「よろしくお願いします、灘宮先輩。」

「どうだろうな。」

これが最後かもしれないぜ。」

「その時はその時ですよ。」

鷹斗の返事に、英樹も笑う。

「確かなな。」

よろしくな、神貫。」

「はい。」

「遅かったな、鷹斗。」

英樹と鷹斗が校門に到着すると、門に寄りかかっていた男子生徒が声をかけてきた。

「ごめん、霧明。」

苦笑いしながら謝り、鷹斗は英樹に向き直る。

「灘宮先輩、ありがとうございました。」

「いや。見つかったなによりだよ。それじゃあ。」

「はい。」

英樹は先に歩き出し、クラスの確認に向かった。

「何か無くしたのか？」

「ああ。」

霧明の問いに答える為、首から下げているペンダントを見せる。

「これを紛失しちゃってね……………」

「携帯電話に連絡できれば、そっちに向かったぞ。」

「悪い。」

「携帯は家に置いてきた。」

「携帯の意味、無いじゃねえかよ……………」

「言わないでよ。」

「んじゃあ、クラスを確認しに行こうぜ。」

「見て来てくれた方が助かったんだけど。」

「言っなよ。」

「よう、英樹。」

掲示された用紙で、クラスの確認を行っていた英樹に、誰かが声をかけてきた。

「よう、凍夜。

珍しく早いな。」

「最近、早く起きるようになっているんだよ。」

英樹の隣に並び、共に掲示を眺める。

「お前、2組だな。」

「人のを先に見つけるなよ……………」。

凍夜に言われた箇所を見やり、そこに自分の名前があるのを知った英樹は毒づく。

「気にするなつて。」

「じゃあ、先に行く。」

そう言って歩き出した英樹だったが、凍夜に肩を掴まれる。

「俺の分を見つけるよ。」

「誰が。」

「ケチだな……………」

「ほっとけ。」

携帯電話を取り出し、残りの友人にメールを送る。

「怜奈達にか？」

いつの間にか傍に来ていた凍夜が聞いてきた。

「ああ。」

「アイツらも同じクラスみたいだ。」

「ちなみに俺もだ。」

「知っている。」

「知っていたのかよ!？」

凍夜のツッコミに耳を貸さず、昇降口に向かった。

靴を取り出した時、携帯電話が振動する。

「怜奈からか。」

一番親しい友人から返ってきたメールを開く。

「なんだよ……………」

「どうした？」

「アイツら、もうクラスにいるってよ。」

「何だ。」

じゃあ、英樹が送ったメールは無意味って事か。」

「そうなるな。」

やれやれと内心で嘆息し、凍夜と一緒に2年2組に足を運んだ。

（そつえば、唯と和は何組になったんだ？）

教室の扉を開けながら、英樹はぼんやりとそんな事を考えていた。

「あれ？
なつつん？」

廊下を歩いていた霧明と鷹斗の背後から、聞いた事のある声がかかった。

「岩沢？」

「ほえ？ 誰が？」

「お前だよ。」

「私は平沢だよ！」

「ああ……………」

そつえばそつだった気もする……………」

「もつ……………」

霧明に名字を間違われ、唯は脹れっ面になる。

「知り合い？」

「ただの、な。」

「友達だよ。」

鷹斗の質問に、霧明と唯の答えが重なった。

「で、何か用か？」

「ううん。」

ただ、前方になつつんを見つけたから、声をかけただけ。」

「なんだよ……………」

呆れ、霧明は先に歩き出した。

「ところで、貴方は？」

「俺は神貫鷹斗。」

よろしくね。」

「うん、鷹くん！」

2人の自己紹介が終わり、霧明の元へと駆けた。

「なつつんと鷹くんは何組なの？」

「3組だよ。」

「じゃあ、私と一緒にだね！」

嬉しいのか、興奮気味に答える唯。

「唯。」

「あ、和ちゃん。」

教室に入ろうとしていた、眼鏡をかけた女生徒が唯に駆け寄ってきた。

「紹介するね。」

私の友達で、真鍋和ちゃん。」

「よろしく。」

「風星霧明。」

「神貫鷹斗です。」

霧明は淡白に言い、鷹斗は礼儀正しく答えた。

「さつさと終わんねえかなあ……………」

椅子の下に鞆を置き、霧明はそんな事をぼやいた。

「どうしてさ？」

「かつたるい……………」

「そうは言ってもね……………。
まだ着いたばかりだし。」

「葵、ちゃん行っただろうなあ？」

椅子に寄りかかり、視線を窓に向ける。

「当然でしょ。」

「しっかりとした子なんだから。」

「まあな。」

「けど、1度だけ家事に集中していて、学校に遅刻しそうになった時があるんだよ。」

「そうなんだ。」

その時、クラスの担任教師が入ってきた。

「これから出席を確認して、入学式を行う。
勝手に抜けだしたりするなよ。」

「抜けだしたいなあ……………」。

英樹の後ろで、凍夜が呟いた。

「無理に決まっているだろ。」

嘆息し、凍夜の肩を叩く。

「凍夜、英樹、行くわよ。」

既にほとんどの人数が講堂に向かう中、怜奈が残っている親友に声をかける。

「今行く。」

「メンドイなあ……………」

「まだ言ってるのかよ……………」
「ほら、行くぞ。」

「連れてってくれ……………」

「しょうがねえなあ……………」
「一歩3000円になるぞ。」

「高いだろ!？」
「しかも一歩かよ！」
「普通は10分とかじゃないか?」

「ばやいてないで、とっとうと行こうぜ。」

「ん、了解だ。」

あっさりとテンションを切り替え、凍夜は英樹の後に続いた。

「眠い…………。」

「隣で寝たら、その足、踏むわよ。」

凍夜の気だるそうな声の後に、怜奈が警告する。

「それだけは勘弁してくれ…………。」

「ダメだよ、怜奈。」

いくら凍夜がMだからって、そんな事しちゃあ…………。」

「違うからね!？」

深鈴も変な事言わないでくれる!？」

「講堂に響いているぞ、凍夜…………。」

「深鈴が響かせるような事を言ったからだろ…………。」

悠斗の呆れに、凍夜は落胆する。

「お前ら、静かにしろ…………。」

英樹の後ろで、直衛が注意したのを最後に、彼ら彼女らは口を閉じた。

「2年生、か……………」

講堂の天井を見上げながら、英樹はこれからの事をぼんやりと考えていた。

第1話 「START——それぞれの始まり」 (後書き)

英樹

「軽音部の『け』の字すら出なかったな。」

鮮血

「と言うか、君が軽音部に入るのはどこら辺だろう？
なんか、唯がギターを手にしたぐらいになりそうなんだけど。」

英樹

「そうになると、まだ先なんだな。」

鮮血

「そうなるね。」

第2話 「MUSIC — 軽音部 —」

自室で着替えを終えた英樹は、朝食を取るべく1階に下りる。

「…あれ？」

しかし、1階には誰もいなかった。

「兄さん達、朝早かったのか……………」

机にある書き置きを一瞥し、自分の分の朝食を電子レンジにいれる。

それが温まるまで、英樹は椅子に座って待つ事にした。

ついでに、携帯電話を確認する。

「誰だよ。」

メールが1件あり、それを開く。

「唯からか。」

カチカチと操作する音をたてていると、電子レンジが温め終わった事を知らせた。

唯に返信してから、朝食を取り出す。

「そういえば……アイツは部活、どつするんだろうっ?。」

ふとそんな事を思ったが、すぐに忘れる。

「まあいいか。」

けいおん！ Memorial Reverie

第2話 「MUSIC —軽音部—」

「霧明、部活は決めた？」

昼食時になり、霧明は鷹斗と一緒に昼食を取っていた。

「なんだよ、藪から棒に？」

「そろそろ、部活申請の終了期限だし。それに……………」

言いながら、鷹斗は唯と和の方を見る。

「まだ部活決めて無いの!？」

「だってえ……………」

「今から何かに打ち込んでおかないと、ニートになるわよ……………」

「部活をやってないだけで!？」

「ニートだってさ。」

唯と和のやり取りに、鷹斗は苦笑する。

「…………… 知るかよ。」

霧明は興味なさげに答える。

「それに、お前はどつするんだ?。」

「俺?」

やっぱり、軽音部かな。」

霧明と鷹斗は、中学生の時軽音部に所属していた。

「見学には行ったのか？」

「行っただけど……。」

「留守みたいだったんだよね。」

こないだ部室に向かったのだが、誰もいなかったそうだ。

「真面目にやってねえんじゃねえの？」

「なのかなあ？」

「で、話って何だ？」

放課後。

英樹は唯一一緒に帰ろうと持ちかけられ、今は彼女と帰っている。

「今日、和ちゃんに部活の事言われて……………」。

凹んでいるのか、唯の声のトーンは低かった。

「部活、ねえ……………」。

「そつえば、お兄ちゃんも部活に入って無いよね？」

「ああ。」

やる気が起きないって言うか……………」。

「じゃあ、お兄ちゃんも将来はニートになるんだね！」

「何でだよ!？」

「え、だって和ちゃんが……………」。

和に言われた事を話し、唯は英樹をニートだと決めつける。

「うーん……………」。

まあ、予め何かに打ち込めるものがあれば、会社も長続きするだろうけど……………」。

一概に部活をやらなくてもニートって訳でも無いと思うが。」

「そうなんだあ。」

間延びした唯の返事に、英樹は微笑した。

「ただいまー。」

「おかえり、葵。」

どこかの中学校の制服を着た少女が、霧明に挨拶をする。

「ただいま、お兄ちゃん。」

霧明の妹——葵は、中学1年生の少女だ。

「そういえば……。」

葵はどの部活をやるのか決めたのか？」

夕食の準備をしながら、霧明は葵に問う。

「ううん。」

部活はやらないつもりだけど?」

「今から打ち込めるもの、持った方がいいぞ。」

「それはお兄ちゃんもだよ?

私に遠慮ばかりして、中学校の頃も皆より早く帰って来ちゃったし…………。」

「俺の勝手だ。」

「もう…………。」

少しは我儘になった方がいいよ?」

「色々と気を遣う妹だなあ…………。」

肩を竦め、霧明は葵に向き直る。

「気を遣い過ぎている兄がいますからね。」

笑顔を見せる葵に、霧明も笑った。

「と言う訳で、軽音部って所に入ってみたよ！」

「いきなりなんだよ……………」

後日。

唯は鷹斗と霧明、和の前でそう宣言した。

「軽音部に？」

「うん！」

だって、『軽い音楽』って書くぐらいだから、きっと口笛とかそんな事しかないよ。」

唯のその言い様に、霧明は頭を押さえた。

「唯、軽音部って言うのは……………」

その様子に苦笑いした鷹斗が、唯に軽音部の事について話す。

「軽音部って言うのは、主にギターとか、ドラムとか、あとはキーボードとかベースとかの楽器をやるんだよ。」

「ええええええええ！？」

鷹斗の説明に、唯は驚いていた。

「ど、どうしよう……………」

もう入部届け出しちゃった……………」

「何やってんだよ……………」

唯の今の状況に、霧明は呆れた。

「どうしよう、和ちゃん？」

「私に言われても……………」

「謝りに行くしかないんじゃない？」

戸惑う和に代わり、鷹斗が答える。

「そ、そんなあ……………」

怖いのか、唯はかなりしょぼくれていた。

その様子の唯を見て、和は霧明と鷹斗をこっそりと呼ぶ。

「なんだ？」

「可能だったらでいいから、2人をお願いがあるの。」

小声で、唯には聞こえないように話しこむ。

「唯を、軽音部に入れてあげて。」

「は？」

「大丈夫なの？」

和の提案に、霧明も鷹斗も不思議に思う。

「唯って、なんだかカスタネットとかぐらいしか出来なさそうなんだけど……………」

鷹斗は、未だに頭を抱えている唯の方を見る。

「軽音部にプラスの要素が無いんじゃないか？」

「そうなんだけど……………」

あの子、今まで特に打ち込んできた事が無いから……………」

「だから、軽音部に打ち込めるようにって事か？」

「うん。」

3人は、もう1度唯の方を見る。

「まあ、いいか。」

「そうだね。」

和の依頼に、霧明と鷹斗は頷いた。

「い、いっただよね……………」

「何でそんなにビクついてんだよ……………」

放課後になり、唯を先頭に、霧明と鷹斗は共に軽音部へと向かった。そして、その部室の前まできた所で、唯は立ち止まってしまった。

「だ、だって……」。

辞めるなんて言ったら、どうなるか分からないし……」。

ブルブルと恐怖で身体を震わせ、唯は2人の方を振り返る。

「じゃあ、入部しちまえ。」

「でも、何にも楽器できないんだよ!？」

「教えてもらえばいいだろ。」

「そ、そうだけど……」。

「あんたら、部室の前で何やってんの?」

「うひゃあああああ!？」

霧明と唯が言いあいをしていると、背後から女子の声がかかった。

突然の事に、唯は文字通り飛び上がった。

「この子の付き添いなんだ。」

鷹斗は唯を指さす。

「もしかして、平沢唯さん!？」

「え……………」

「そ、そうですね……………」

「いやあ、ギターがすごく上手なんだよね!？
待っていたんだよー!」

「なんか、誤解が生じているみたいだね……………」

「だな……………」

唯の手を取って、勝手にテンションが上がっているカチューシャをつけた生徒は、霧明と鷹斗の事を気にせず、唯を連れて部室へと入る。

「零、ムギ!

あの唯さんが来てくれたぞ!」

慌てている唯を無視し、カチューシャ（仮名）は、部室へと入っていく。

「本当か!？」

「良かったですね。」

漣、ムギと呼ばれた2人の少女が椅子から立ち上がる。

「よし！」

今すぐお茶の準備だ！」

「なんでだよ……………」

声高らかに叫んだカチューシャに、霧明は声を殺してツツコンだ。

「どつぞ。」

琴吹紬と名乗った少女が、唯と霧明、鷹斗の前にケーキと紅茶を置

く。

「いや、俺はいい。」

ケーキを自身から少し離し、紅茶に口をつける。

「甘い物、苦手なのか？」

霧明の真正面に座っている、秋山澪が聞いてくる。

「ああ。」

短く答え、紅茶をソーサーに戻す。

「ところで、平沢さんはどんなバンドが好きなの？」

カチューシャ——もとい田井中律が、ケーキを頬張っている
唯に訊ねる。

「え、えっと……………」

すっかり忘れていたのか、唯は返答に詰まる。

「好きなギタリストはいるの？」

その答えを待たず、今度は漑が唯に質問を投げる。

唯は縋るように霧明と鷹斗の方を見るが――

「それじゃあ、琴吹は小さい頃からキーボードを？」

「うん、そうなの。」

――鷹斗は紬と話しており、霧明は紅茶を飲んでおり、スル
ーされてしまった。

意を決して、唯は立ち上がる。

「あ、あの！」

実は私、入部を断りに来たんです……………。
楽器も、ほとんど出来ないし……………。」

「ほとんどって事は、出来る楽器もあるんだよね？
何ならできるの？」

律の質問に、唯は逡巡しながらも、答える。

「カ、カスタ……………じゃなくて、ハーモニカ！」

（そこは素直に答えろよ……………。）

唯の見栄っ張りに、霧明は内心呆れる。

「あ、ハーモニカならここにあるから、吹いてみ……………。」

「ごめんなさい、出来ません！」

律の言葉を遮り、唯は平謝りに謝る。

「どうしようか、霧明？」

小声で話しかけてきた鷹斗に、霧明は彼の方を向く。

「和に言われた事か？」

「うん。」

さすがに、難しいかな？」

「かもなあ……………」

しよばくれていく唯と、軽音部の部員達を横目に、霧明達も唸っていた。

「そうだ。

せっかくだし、演奏してみてよ。」

鷹斗からの提案に、漑達3人は同意してくれた。

各々、自分達の楽器を手に取り、【翼をください】を演奏した。

「どう思う？」

「普通……………」

鷹斗の耳打ちに、霧明は素っ気なく返す。

「実力もバラバラだしな。」

「それには同感だね。」

やはり、小さい頃から慣れ親しんでいるからか、紬のキーボードがかなりの腕前だった。

「でも、いい音を出しているよね。」

懐かしそうにその音色を聞きいる鷹斗に、霧明も「そうだな」と小さく頷く。

やがて演奏が終わった頃には、唯の表情は明るかった。

恐らく、演奏に感動したと考えていいだろう。

「どうだった？」

演奏が終わり、律が開口一番聞いてきた。

「なんていうか……凄く言葉にしにくいんですけど……。」

言葉を必死で拾おうとしているのか、唯は慌てる。

それが落ち着き、零達の方を見て答える。

「あんまりうまくないですね!」

「おいおい……………」

「アハハ……………」

唯の答えに、霧明は再び呆れ、鷹斗は苦笑い。

そして、軽音部の当人たちは呆然としていた。

「でも、なんだか淒く楽しそうでした。
私、軽音部に入部します！」

「え……………」

「ホ、ホント……………」

まさか入部と言う単語が出てくるとは思っていなかったのだろう。

3人は驚いて固まっていた。

「入部だつてさ。」

「なら、俺達は今いいだろ。
帰ろうぜ。」

「そうだね。」

霧明と鷹斗は、これ以上する事は無かったので、部室を先に出ていく。

「やったああああ！！！！
4人目だ！」

律は大喜びし、唯の肩を強く掴む。

「そうだ！
せっかくだし、付き添いの2人も……………」

もっと部員を増やそうと思ったのか、律は霧明達の方を見たが――

「あれ？」

――既に2人は、部室を出て行った後だった。

第3話 「JOIN ―入部―」（前書き）

今回のお話は、軽音部に唯が入部した次の日から始まります。

霧明と鷹斗の2人を入部させたいと思う律達ですが……………。

第3話 「JOIN——入部」

唯が軽音部に入部を決めた、その翌日。

澪はいつもの時間を、いつもと同じように登校していた。

ふと、何気なく向けた視線の先に、珍しい表札を見つけた。

『風星』——

表札には、そう書かれていた。

「風星って確か……………」

呟き、澪は昨日の事を思い出す。

確か、唯の付き添いに来た2人の男子の内、右目を失明した少年の

名字もそれだった気がする。

「家、割りと近かったんだな……………」

そんな事をぼんやりと考えていると、玄関の扉が突如開かれた。ポーツとしていた漑は、離れる事を忘れ、その場に立っていた。

「あの……………」

家から出てきた少女に声をかけられ、漑は我に返った。

「兄の友達ですか？」

「あ、えつと……………」

友達ってほども無いんだけど……………」

昨日、友達の付き添いに来てた人の名字も、風星だったから。」

「そうだったんですか。」

少女が納得した時、再び玄関の扉が開かれた。

「何をしている、葵？」

「お兄ちゃん。」

そこには、昨日、唯の付き添いに来ていた少年――霧明がいた。

「あ、風星くん……………」

「ああ、昨日の。」

霧明は澪の姿を認め、淡白に言った。

「葵、そろそろ行かないと。」

「うん」
行ってきます、お兄ちゃん。」

「気を付けろよ。」

1つ注意して、霧明は家に鍵をかけた。

「ねえ、風星くん。」

「何だ？」

「その……。」

口籠る漑に、霧明は首を傾げる。

「やっぱり、なんでもない！」

頬を赤く染め、漑は1人で駆け出した。

「なんなんだ、アイツ？」

漑の様子に、霧明はただ呆然としていた。

「霧明。」

「よう、鷹斗。」

その後現れた友人に、霧明は挨拶をかわす。

「今の、秋山さんだよね？」

「誰が？」

「さっき走って行った人だよ。」

「アイツ、そういう名字なのか。」

「昨日話したじゃないか。」

「忘れていたんだよ。」

呆れる鷹斗に「いつもの事だ」と付け加え、霧明は彼と一緒に歩きだした。

（結局アイツ、何を言おうとしたんだ？）

思い当たる節もなく、霧明の考えが答えを導き出す事は無かった。

けいおん！ Memorial Reverie

第3話 「JOIN ―入部―」

「はぁ……………」

一方、件の漣はというと、走り疲れて途中で息を整えていた。

「軽音部の付き添いに来たって事は、音楽に興味があるか……………」
それを聞こうと思ったのに……………」

一息ついて、彼女は走ってきた道を振り返る。

「やっぱり、男の人は苦手だな……………」

繊細である漣は、相手が男と言っただけで苦手意識を持っていた。

その為、霧明と話す事が億劫になった彼女は、その場から逃げ出し

てしまったという訳だ。

「み〜お！」

「キャアアアアアアア！？」

その時、いきなり背後から声をかけられ、漣は文字通り飛び上がる。

「そ、そんなに驚かなくても……………」

「り、律……………」

漣に声をかけたのは、幼馴染の律だった。

「い、いめん……………」

「ほら、学校に行こう。」

「うん。」

学校に到着してから、澪は律に霧明の事を告げた。

「へえー。」

「で、軽音部に入部してもらえないかなあって思ってた。」

「うーん……納得してもらえるのかぁ？」

律は腕を組んで考え込む。

「一応、平沢さんと同じクラスだから、今度の放課後にでもクラスを覗いてみよう。」

「そうだな。」

「部活？」

「うん。」

英樹は入部しないのかなぁと思って。」

昼食を取っている最中、深鈴にそう聞かれた英樹は唸った。

「特にやりたい事もないしなあ……………」。

「まあ、私達も特定の部に入っているのは少ないからね。」

怜奈の言葉に、直衛と悠斗も頷く。

「そういえば、最近廃部を免れた部があるって聞いたけど。」

悠斗のその言葉に、英樹は首を傾げた。

「ああ、軽音部な。」

そこへ、隣に座した凍夜が言ってきた。

「軽音部って……………」。

それを聞いた英樹は、妹の事を思い出した。

確か、彼女も入部したとか言っていたなあと。

（唯が興味を持った部活か……。聊か気にはなるな。）

頭を振り、彼は昼食に意識を戻した。

「唯、一緒に帰ろう。」

それから1週間後の放課後――

和は、唯の傍まで行ってそう誘う。

「ごめん、和ちゃん。」

今日から軽音部に行かなきゃいけないから。」

「そう。」

部活に行く――

それを聞いて、和は嬉しく思った。

（この子にも、ようやく打ち込めるものが出来たのね。
嬉しいような気もするし、悲しくもあるわね。）

そんな和の考えなど露知らず、唯は顔を綻ばせた。

「どうしたの？」

「ムギちゃんが、おいしいケーキを持ってきてくれるんだあ」

「楽器の練習は………！？」

「はっ！ そうだった！」

すっかり頭から抜け落ちていた様子の唯に、それを横目に見ていた鷹斗達は笑った。

「唯らしいね。」

「だな。」

「俺らも帰ろうぜ。」

「そうだね。」

そうして、2人一緒に教室を出ると――

「見つけたぞ！」

――律の大きな声が聞こえてきた。

「は……………」

「確か、田井中さんだっけ？」

「田井川じゃなかったか？」

「霧明は人の名前を間違えている可能性が高いよ。」

「それもそうだな。」

律を無視し、勝手に話す2人。

それに怒ったのか、律は鷹斗に詰め寄る。

「2人とも、今すぐ軽音部に入部しろ！
さもなくば命を……………」

「真面目にやれ！」

訳のわからない事を口走る前に、澪が律に真面目にやるように促す。

「イッテエー……………」。

殴られた律は、その箇所を手で押さえる。

「なんなんだよ……………」。

呆れる霧明に、澪が謝罪する。

「ごめん、風星くん。

実は、2人に軽音部に入部してほしくて……………」。

「それはまた、どうして？」

「やっぱり、演奏の幅が広がるから……………」。

「入るかどうかは……………」。

前を向いていた霧明が、澪に向き直る。

「俺達自身で決める。」

「それはもちろん、構わないよ。
良かったら、見学していかないか？」

「さっすが漣！」

部長の私の為にありがとう。」

「どうする、霧明？」

霧明の顔を窺った鷹斗は、笑っていた。

その顔から、彼の気持ちを理解できる。

霧明と鷹斗は、それほど互いの事を良く知っていた。
もちろん、互いに黙っている事もある。

それでも、信頼するには充分だった。

「お前が行きたそうだから、ついでに行つてやる。」

「霧明からの許しも出たし、2人で見学しに行くよ。」

「それじゃあ、行こうか。」

漣が先に歩き出し、その後を律がついていく。

「行こう、霧明。」

「ああ……………」

鷹斗にそう促され、霧明も歩き出した。

「2人は楽器は何が弾けるんだ？」

席に着いている澁からの質問に、鷹斗が先に口を開いた。

「俺はベースだよ。」

秋山さんとは違って、右利きだけど。」

「そっか。」

心なしか、彼女は肩を落とした。

「まあ、レフティはあんまりいねえって話らしいからな。」

「あ、うん。」

それで、風星くんは？」

「俺はギターだ。」

「俺と霧明は、中学校の頃に一緒に軽音部に入部していたんだ。でも、今はメンバーが散り散りになったからやってないけどね。」

「そうなんだ。」

「しかし、いつもこんな感じなのか？」

霧明は、楽しそうに会話をしている唯達の方を見る。

彼女らの手元には、ケーキと紅茶が置かれていた。

「あ、うん…………。」

「ふーん…………。」

雫の返答を聞き、霧明は視線を逸らした。

「怒ってる、かな？」

真正面に居る鷹斗に、声を潜めて漣は問う。

「多分ね。」

漣と同様に、声を潜めて鷹斗はそう返した。

「まあ、こういう感じなんて今まで1度も無かったからね。
霧明には、ちょっと難しいのかも。」

「だよな……………」

鷹斗の補足に、漣は同意した。

「ところで、平沢さん。」

「唯でいいよ。」

「え？」

唯のその言葉に、漣は僅かに呆ける。

「だって私、皆の事名前と呼んでるし。」

「え…えつと……。ゆ、唯………// // //」

「可愛い！」

照れてしまった漣に、唯は即座に反応した。

「それで、唯はギターを買ったのか？」

それに対して何も言わず、律が唯に聞く。

「あ……まだ……。」

「ここは喫茶店じゃないんだぞ。」

「ごめん、ごめん。」

漣からの注意に、唯は頭を掻いた。

「ギターって、いくらぐらいするの？」

「安いもあるけど……。」

まあ、最低でも5万円ぐらいのが欲しいな。」

「私のお小遣い、10カ月分……。」

その桁に、唯は呆然とした。

「今度の休みに、皆で見に行こうぜ。」

「それはいいわね。」

律の提案に、紬ものつかる。

「それじゃあ、そろそろ帰ろうか。」

漣を筆頭に、全員が立ち上がる。

それを見て、霧明と鷹斗は先に部室を出た。

「霧明はどうする？」

「入部するかどうか……って事か？」

「うん。」

靴を履き替え、2人は学校の敷地内から出る。

「分かん。」

「真面目にやってなさそうだから、入る気は起こらない……………なんて思ってるだろ。」

「ああ……………」

「確かに、今の状態を見るとそう感じるかもね。けど……………」

そこまで言って、ふと足を止めて背後を振り返る。

鷹斗の視線の先には、楽しそうに会話をしている4人の姿があった。

軽音部の4人だ。

「けど、楽しそうだよ。」

「そうだな。」

先に歩き出し、霧明は頷いた。

「明日、秋山さんに渡そうか。」

「ああ。」

2人は、互いの中で軽音部に所属する事を決めた。

第3話 「JOIN——入部——」（後書き）

鮮血

「はい、3話目にしてようやく2人が入部を決めてくれましたw」

鷹斗

「まあ、あくまで決めただけで、まだ本格的に入部した訳じゃないけどね。」

霧明

「もしかしたら取り消すかもしれないな。」

鮮血

「おい……………」

霧明

「って言うか、英樹さんはまだ入部しないんだな？」

鮮血

「うん。なんか知らないけど、まだ入部してくれないんだよね……………」

霧明

「いや、お前がそう書いてないだけだろ……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5104v/>

けいおん！ Memorial Reverie

2011年11月12日01時55分発行